

# シリーズ「創立125周年を迎えて」<sup>第3</sup>回

特別企画

インタビュー

久野修慈  
理事長

&

永井和之  
総長・学長

中央大学の過去、  
現在、そして明日

中央大学は、1885年（明治18年）に英吉利法律学校として創立して以来、今年で125周年を迎えました。『實地應用ノ素ヲ養フ』の建学の精神に立って、社会に数多くの先達を輩出してきた本学は、新たな伝統と歴史を刻むスタート台に立ちました。そこでこれを機会に、久野修慈理事長と永井和之総長・学長に、それぞれインタビューし、「中央大学の過去、現在、そして明日」について語っていただきました。

編集室

——中央大学は創立125周年を迎えました。はじめに、それに対するお気持ちを聞かせください。

## 将来の目標、基準を明確化

久野 大学間の国内、国際競争が激しくなって、その中で中央大学は生き残っていかなければならないということでは、この125周年は将来に向かった中央大学の始まりであるという強い信念と意思で迎えないといけない。中央大学はどんな目標に向かっているのかということを確認にしなければならぬと思うんだね。

目指す基準をはっきりしなければいけない。中央大学は格付けをすると、まだ低い位置づけにある。だから国際化の中で高い位置づけに持つべくために中央大学は、10年後なら10年後に、基準として世界の大学の50位以内に入る。国際的な大学として、こういう研究教育分野や学問については、世界のどの大学にも負けないのだという目標を明確にしないとイケない。企業であれば、目標や目指す基準が明確なだけでも、大学はそれが、ありそうでないんだね。これが、私が一番重要視している問題だね。

もう一つは、中央大学はミドルテンブルから出発したけれども、もっと、建学を進めた18人



久野修慈理事長

「注1」の意思を明確にして、知らせるようにしなければいけない。18人が何のためにこの大学をつくって、法律を勉強したかという点、その当時はまだ日本に法制度が確立していなかった。憲法はあつたけれども、市民の権利というのが本当に確立していなかった。だから市民の権利を法的に明確に確立して、本当の民主主義の国をつくっていくという意思で、18人が中央大学をつくったのだと思うんだね。

そのことにもっと重点を置いて、理解を広げて、国民からの信頼がある大学にしていかなければいけない。それが私の考えていることだね。

——理事長は長い間、一般企業で仕事をされてきました。その視点から、学生は大学での4年間に、どのようなことを培うべきだとお考えですか。

久野 学生が社会に入ると、弁護士であろうと、会計士であろうと、企業

## 卒業生が誇りを持てる大学に 久野理事長

人であろうと、今後は国際的な対応を求められるわけだね。そういう中では学生が自立の精神をもっと強く持たないと、どこの職場でも評価されない時代が来ていると思うんだ。極端に言うところ、依存症から脱皮しなければいけない。学生は、正しい意味での競争力をつけていかなければいけない。そう思っているんだね。

例えば食料について考えてみると、日本では3分の1しか自給がない、3分の2は外国のものだ。この3分の2というのは、外国の土地を利用して、外国のお日様を利用して、外国の労働力を使って、外国の水を使っているんだよ。そういう問題についても依存症から脱皮しなければいけない。国際的に人口が増加して、食料もなくなってくる。これからは一層、消費構造が変わってくるわけだから、自らがそういうものを認識して、依存症から脱皮していかなければと、そう思うね。

——学生は、具体的に何への依存から脱皮すればいいのでしょうか。

久野 今の教育というのは、受験のための勉強をしてきていると私は思うね。ところが問題は思考力なんだよ。考える力。これが失われているわけね。自分で考える力、組み立てる力を持たなければいけないんだよ。それが依存症からの脱皮なのです。

日本の教育システムで一番悪いところは、モノを考える力を養成していないことなんだ。塾に行ったらこの大学に受かるとか、言うなれば、物を覚えることがシステムになってしまっている。

もっと考える力を持たないと、競争には勝てない、生きていけない時代が来ているわけです。学問も重要だよ。だから、学問はやりながら、自分で思考力を徹底的に鍛えるようにやっていかなければだめだね。私はそう、痛切に感ずるね。

## 吉田久、白洲次郎から学ぶ

—— 理事長は学生時代に、吉田久先生<sup>注2</sup>の書生をされました。吉田先生からはどんなことを学ばれたのでしょうか。

久野 私は、学問は大したことないけれども交わりが多かった。いい人に出会った。その人たちが私にいろいろなことを教えてくれた。何が重要かといえば、人と会うことだね。いい人に会うことが、自分の力を100倍にもするのです。

私は吉田久先生の書生を2年半やった。吉田先生というのは、女中さんも大切にしたんだ。おヨシさんという女中さんでね。東北地方出身で、純情な女の人でしたよ。民法の本をつくと、先生はその女中さんにも校正させるんだよ。小学校しか出ていない女中さんでも、その人間性を認めた

んだよ。また教育しているということだよ。吉田先生は人を大切にしているからこそ、ああいう素晴らしい判決が下せた。

—— 社会に出てからは、白洲次郎さん<sup>注3</sup>の秘書もされました。

久野 白洲次郎さんというのも、吉田先生と同じ人なんだよ。両者が共通していることは、とにかく末端を大切にすること、権力に対し徹底的に戦うということだね。そして、無の心境にいるということだね。極端に言うと、学歴無用論信奉者なのです。自分がどんな評価を受けようと関係ない。絶対的に正しい判決を下すのだと。

敗戦国における日本の正しい仕組みをつくるというのが、白洲次郎の考え方だった。日本は戦争に負けたよね。白洲次郎は戦争に反対だった。普通だったら「おれが言った通りだ。ざまあみやがれ、負けたじゃないか」と言う。ところが白洲次郎の偉いところは、そのように批判しないのです。国家的な立場に立った時は、自分の過去のこととは関係なく、これからの日本国家はどうあるべきなのかということ、アメリカとも対決していくわけね。

すごくプリンスフルに徹している。プリンスフルに徹しているということは、よほどの深い思考能力がないと、主義・原則は守れないんだね。ご

まかしの妥協になってしまっただ。敗戦国であっても、頭を下げていたのでは国民は守れないというのが白洲次郎の基本的な考え方だったんだ。

## いい人との出会いが重要

—— 人との出会いで、影響を受けてきたということですね。

久野 私の場合は、実践で鍛えてきたんだよ。先ほど言ったように、学問も重要だけれども、いい人と会うことが重要。会わないというのは、信頼がないのです。信頼があれば次から次へといい人に会える。会えれば自分が付いてくる。そういうことだよ。人とのめぐりあいによって、人は育つてくるのだよな。

私が勤めた大洋漁業という会社の（当時の）社長は、高等小学校しか出ていない。でも世界的なリーダーだった。戦争前までは、大洋漁業とか日本水産にある船は、全部戦争に徴用されてしまった。戦争の運搬船などに使われた。それが戦争の協力者としてレッドパージに遭うわけだが、中部謙吉<sup>注4</sup>という人は、パージを解かれて何をやったか。復興金融公庫とあって、政府が日本を復興するための金融機関をつくった。そこからお金を借りて、日本の造船所に250隻の船を発注するんだ。



人とのおいで力がつく、と久野理事長

何のために発注したか。疲弊して仕事がない造船所に仕事を与えるためだった。日本の経済成長は、造船から始まったのです。帰ってきた兵隊さんも仕事がない。その兵隊さんを造船所で働かせた。そうすると雇用が生まれる。できあがった船で魚を獲りに行く。そして、獲ってきた魚は、国民の食料として提供したんだね。自分の利得でやっているわけではないんだよ。

のすごい主義・原則がある。今、何のために自分は仕事をやらなければいけないか。国民は食料がなくて困っている。それに対する決断をするときに、人を動かしているわけだよ。そういうものが本当の経営者だと思うし、あらゆる面でそうではないかな。

—— 学生同士で議論するなかで、中央大学の学生はどこか受動的で、自分から何か考えて発信するという力がないのではないかという話がよく挙げられます。中央大学の問題点や課題のようなものがあるとするれば、何だとお考えですか。

### 考える力を養成する

久野 それは先ほども言った

ように、高い目標があつて、それに向かつて学生をどうやって教育していくかということだと思ふね。今までのカリキュラムはそれとして、もつと考える力を含めて養成する教育のシステムをつくらなければいけないね。極端に言うと、今の教育はばらばら。個人、個人の融和が取れているように仲良さそうだけれ

ども、ばらばらなんだ。組織というのは集団だから、集団の一員としてやらなければいけないことがある。だから学生の教育の中でも、カリキュラムに実践的な講座を設けて、組織、集団というものに交わっていかなければいけない。

お互いに信頼しあう力というか、それは学問より重要だと思ふんだよ。それぞれがそこで融合する力、意見を交換する力、こういうものを持つような大学のシステムをつくっていかなければいけない。社会に出てチャンスを生み出すような教育の場を設けていかなければいけないと思つているんだね。そうしないと、社会に出た時には競争が激しいから、他の人が面倒を見てくれるわけではないんだ。それぐらい世の中というのは冷たいものなんだよ。

—— 組織、集団のなかで、如何に自立心を発揮するということですか。

久野 法律家も同じだよな。司法試験に合格した人と話すと、ほとんどの人が日本経済新聞を読んでいる。それでは社会に出て、法律家としても役に立たないね。国際的なあらゆる金融システムの中で、いろいろな問題が発生するわけだよ。弁護士になったからといって、誰も教えてくれるわけではないよ。日経新聞を隅から隅まで読む力があれば、思考能力として、どこに行っても役に

立つよ。日経新聞を読んでいないのは、法律の勉強で試験に受かることが当面の目標だったからやむを得ないにしても、それではだめなんだね。

だから社会に出て本当に役に立つような教育。そういう講座を設けなければいけないと思っっているんだ。

—— 日経新聞というのは、新聞であれば何でもいいということですか。それとも日経新聞というところがポイントなのですか。

久野 そんなことないよ。どんな新聞でもいいよ。新聞はどれでもいいけれども、法律をやるにしても、何を志向するにしても、経済の仕組みが分からなかったらはずきり言っ、これからは生活できないよ。この会社の株がこれだけ下がったのは一体何なのか、この会社が国際的な競争力がなくなったのは何なのか、そういうことをもっと勉強すれば、どこに行っても抵抗力を持つことになるよ。だから、自分の学問しか知らないのだということでは、生活できないと思うね。そのところが重要だと思うよ。

### 特徴をつけて送り出す

—— わかりました。

久野 もう一つ、中央大学として、この125周年を記念して何をするかということになると、

卒業生やお父さん、お母さんが中央大学を卒業して良かったと思っ、欲しい。会社に入った時に、私の卒業した中央大学は素晴らしい大学だったと、卒業生が誇りを持てるような大学に、今こそしていかねばいけない。それが125周年を記念してやらねばならない重要なことだと、私は思っ、ているということですよ。

我々が戦後、経済界に入っ、中央大学出身は「可」だよ。それが昔の中央大学の経済界における位置付けだったということだよ。法曹の社会では優位に立っ、いたかもしれないけれども、社会というのは法曹だけではないんだよ。どんな社会でも優位に立たなければいけない。そのためには、卒業した大学が「可」と言われてはだめだよ。ね。「中央大学を出て良かったね」と言われる大学を、強く目指さなければいけない。それが卒業生にとっ、ては一番大きな力になる。

全国を歩いていて、中央大学の弱さを痛切に感ずるよ。OBから相当言われる。その通りだと思っ、う。今の学生がそういう感じを持っ、ているか持っ、ていないか分からないけれども、やはり中央大学に夢を持っ、てきたのだから、卒業して社会に出る中央大学の卒業生だという高い評価を受けるためには、大学がしっかりしなければだめなんだよ。

—— そのためには、どういったことが必要と

お考えですか。

久野 基本的に言えば、入っ、てきたときよりレベルを上げるために何を習得させたらいいかということを考えなければいけないと思っ、うんだね。単位を取るために、まんべんなく教育するという方法ではないと思っ、う。それぞれ個性があるのだから、マンツーマン教育というかな、そういうことをしていかないとだめだと私は思っ、うね。数が多いからできないということでは、ないはずだよ。

少子化の問題はあるにしても、国際的にこれだけ大学の数が増えてくれば、それぞれがいい大学を目指して行くのは当たり前だよ。そうしなければ大学も生きてはいけない。入っ、てきた学生に特徴をつけて送り出さなければいけない。先生方も熱心に教育をされておられるが、厳しい競争社会を経験されておられないだけに、現在、これらの激動する社会に対応する実学の教育を徹底してもらいたい。我々は、中央大学出身は「可」と言われてきた。それを一層変えていかなければならないとみているんだよ。

### 社会に出て役立つ学問を

—— では、これからの中央大学の展望をお聞かせ願っ、たいと思っ、います。

久野 とにかく教育で勝たなければいけないよ。



八王子にあっても、八王子にしかない、こういう特徴があるのだと。世界であそこの学校に行かなければだめなのだ。あそこの学校に行けば日本の、世界のリーダーになれるのだと。その特徴をいかにつけるかということが非常に重要だと思うね。

例えば、英語と中国語はじめ3カ国語くらいを徹底的にやって、それでしか教育しないという部署、学部を設ける。そして何か特徴をつけて送り出す。中央大学の八王子でしか学べない学部というか、特徴ある学科、教育課程をつくらねばならないと思う。そこに、いろいろな学部の学生が挑戦できるようなシステムをつくっていかねければだめだろうね。

#### インタビューに答える久野理事長

—— 外国語のシステムは、明日にでもつくっていただきたいです。

久野 これからは、ネゴシエーション能力を持たなければいけない。交渉能力という問題は、英語ができるかどうかできないとかという問題ではないんだよな。ネゴする力を持たないと、これからは勝てない。あらゆる面で交渉能力を持たなければならない。女性でも男性でも、しっかりした交渉能力を持つていないと、リーダーシップは取れないね。

そのことが社会で役立つ、社会に出た時のチャンスを与える学問を教えることになる。私は今、それが絶対必要

だと思うんだ。学生、卒業生を、いろいろな職場で見ていると、そう感ずるね。

(このインタビューは9月21日に行いました)

注1…創立者は増島六一郎、高橋一勝、岡山兼吉、高橋健三、岡村輝彦、山田喜之助、菊池武夫、西川鉄次郎、江木衷、磯部醇、藤田隆三郎、土方寧、奥田義人、穂積陳重、合川正道、元田肇、渡辺安積、渋谷慥爾の18人。

注2…1905年(明治38年)に本学の前身の東京法学院大学を卒業。1945年3月1日、戦争が激しさを増す中、大審院判事として翼賛選挙に唯一の無効判決を下す。政府からの圧力に屈することなく、身命を賭して法に遵い正義を貫き通した「伝説の判事」。

注3…戦後の占領期、吉田茂首相の右腕として連合国総司令部(GHQ)と対等に渡り合った人物として知られる。1970年秋、白洲氏が大洋漁業(現マルハニチロ水産)の社長相談役に就任したとき、当時、同社社員だった久野氏を秘書に指名した。

注4…大洋漁業(現マルハニチロ水産)3代目社長。父は創業者の中部幾次郎。1977年に死去するまで24年間にわたって社長を務め、戦後の日ソ捕鯨など国際漁業交渉を進め、経営の多角化を推し進めた。

# 学生を一番成長させる大学に 永井総長・学長

—— 中央大学は創立125周年を迎えました。はじめに、それについてのご感慨をお聞かせください。

永井 去年の秋に行ったミドル・テンプルはチャプターという憲章が国王によって認可されて

400年が経っていました。それから中央大学と一番古い交流をしているエクス・マルセイユ、今のポールセザンヌ大学が600年。ケンブリッジ大学が800年。古いところではみんな1000年単位で祝っています。

ただ、こういうアニバーサリーというのは自分達の現状をきちんと認識して、そして将来に向けて強く一歩を踏み出す、そういった一つの転機ではないかという感じがしますし、大きなビジョンを変えるところというのは四半世紀が一つの区切りなのかなという感じはします。

永井和之総長・学長

## 社会に有意な人材を

—— 中央大学は「實地應用ノ素ヲ養フ」を建学の精神注IIにしています。

永井 「實地應用ノ素ヲ養フ」というのは現代社会において本当に有意な人材を創ろうと

いうことでしよう。社会の課題に応えられる人材を輩出しようということです。そのために、どのような能力を持った学生を輩出するのか、そこがポイントです。学生達にいろいろな問題を現実の中でどう考えるのかということを開いて、自分できちんと認識をさせて、自分なりに意見がしっかりと見えるような、そういう学生をつくらないといけない。それが大事だと思います。

—— 例えばどういうことですか。

永井 例えば、1点の差で入試の合否が決まる場合がありますが、入試では漢字のここが跳ねている、跳ねていないで2、3点違ってしまいかもしれない。それがどれだけの意味を持つのかということです。

それから、ハーバード大学などに入る学生の親は富裕層が多い。日本でも東大の学生の保護者の収入が平均的には一番高いとかで、高収入の親のもとには高学歴の子供ができるということが社会問題としてあります。社会階層が分かれてきていて、固定化し、または拡大再生しています。そういう社会階層を拡大再生するような偏差値的な入試システム、その問題をどう捉えるのか。

または今の就職難。学生にとってみると、卒業する年がたまたま不景気で就職口がない。そんな巡り合わせだけで若い人の一生が左右されてしまう。そのような社会構造で本当にいいのか。だけど、



労働市場を流動化して、若い人が再チャレンジできるような社会にしようということは、今、働いている人達には不安定化をもたらす。社会構造の変化というのは、働いている人達の利害とぶつかるかもしれない。そういうところで、社会の仕組みをどうするか。

年金でもそうです。日本の年金、社会保障は、現役世代が年金世代の面倒を見ていくというシテムで基本的に成り立っています。少子高齢化が進んでいけば、現役世代が年金世代を面倒見ることはとてもできなくなります。今の年金制度では成り立たないとすれば、どのような社会福祉、社会保障制度がいいのか。

そのように、現実のいろいろな問題を、学生達が自分のこととしてどう考えるのか、ということです。

## 自発的人間を育てる

—— お話をうかがっていて、世界や社会を大きく捉えて物事の本質をどう見抜くか、それに対してどうアプローチしていくかということを考える力が求められていると感じました。

永井 そういうことです。今までにない社会が出てきていますから、既存世代が教えられる答えがないんです。地球温暖化の問題もそうです。まさにそれは君らの次の世代の問題で、さらに後の

世代にどう社会をバトンタッチしていくか。それは前の世代の責任でもあります。そういうところまでをきちんと考えることができる、そういう人が将来の社会のリーダーになると思います。

「實地應用ノ素ヲ養フ」という建学の精神を持った中央大学としては、そういった新しい社会の課題、今までになかった新しい問題、答えがない問題に答えられるような人材、または少なくともそれについてきちんと問題意識があり、発言できる、そういった人間を育てる責任があります。

逆にそういう人間、学生を育てていなければ、建学の精神に基づいた教育ができていないということになります。それが私達の自己点検の評価基準です。教員一人ひとりが、自分の教育がそのような基準に照らして適っているかどうかを自己採点しないといけない。単に知識を教えていないか。知識を教えるだけではなくて理解させて、さらには応用させて、いろいろなことを調査したりして、それによって自分はこう考えるといった自発的人間を育てているか。そういうことが問われるのだと思います。

—— 学部を横断したゼミのFLP（フアカルティ・リンケージ・プログラム）は学生の関心が高いです。

永井 昔は18歳で選んだ学部がどうも自分には合わないとなれば転部・転科試験がありました。

今はそれをしていない。転部・転科試験を復活させないでやっているのがFLPですよね。転部・転科は、本籍を変えてしまうわけですが、FLPは、本籍にいながら現住所をFLPに置いている。私はFLPは転部・転科を高度に進化させたものではないかなと思います。将来の自分はどうやって生きていくかを考え、自分はこういう勉強がしてみたいということでFLPがあります。18歳で選んだ学部と自分の将来ビジョンが異なった場合の受け入れ方法としてのFLPを拡充したいというのが今の基本的な方向性です。

—— 「法科の中央」から現在では総合大学化していますが、現状の課題は。

永井 アルプスのように、いろいろな学部が高くそびえ立って欲しい。一つだけが高いのではなくて、すべての学部が高くあつて欲しい。そこで競い合つて欲しい。今は入試のときの偏差値で何となく規定してしまっていますが、それはもう変な話で、それでは本当の総合大学としての強みが発揮できない。

## 出口もトップの大学に

—— 全学部が同じぐらいの高さになるためには、どうしたらよいとお考えですか。

永井 大学に入つてからの成長の伸びを大事にすることです。そして、どこの学部を出ても中央



大学の出身として企業などの評価が同じようになることが必要です。入口を上げるためには出口を上げる。目標にすべきなのは、偏差値トップの大学というだけではない。出口もトップの大学であるべきです。中央大学に入ったら伸びる。日本全国で中央大学は学生を一番成長させる、そういう大学だと言ってほしい。

—— 出口がトップの大学とは？

永井 この間、その話をしたら、マスコミの人が、それ(成長)はどうやって測るのですかと聞くので、「学生の満足度だ」と答えた。どの学部でも自分が卒業するときに、学生生活の4年間に悔いはない、自分はいろいろなことを一生懸命やった。4年間に悔いはないというかたちで卒業する学生達の率が高ければ高いほど、中央大学は学生を伸ばしたということになります。それが評価の基準だということについては、マスコミの人達も、ああそうかと。

自分の学生時代に悔いがないと思う人は、社会に出ても伸びます。自信を持っていきます。そうしたら社会も評価します。ところが、悔いを持っていて、自分の学生時代に自信がないと、社会に出てても自信がない。「中大でこういうことをやってきた。文句あるか」くらいのことが言えるようになっていけばいい。

—— チャレンジすれば大いに満足度が得られ

る大学ということですか。

永井 そうですね。だから、満足できるようないろいろな装置や仕組みを学内にたくさん多様にくつておく。そういう環境をつくっておけば、4年間過ごすなかで学生達が本当に将来の夢やビジョンを持つたり、自信を持つたりする。そういう装置や仕組みが必要です。それをどれだけつくつていけるかが大学の、ある意味では評価基準にならないといけない。

—— 多様な選択肢を備えておくということですか。

永井 多様な選択肢であるし、多様な場ですね。例えば、多摩キャンパスのいいところは、1年から4年までいて、いろいろなことをやっている学生が一堂に会している。こういうキャンパスがほかの大学にありますか。学生時代にいろいろな人と出会って、いろいろな学生とぶつかりあったり切磋琢磨したりすることによって人間的に成長する。スポーツでも学術、文化活動でも、いろいろなことにチャレンジして燃えている学生が身近にいる。これが大事です。

それから、装置としては、学生達にいろいろなことを経験させて、自分の生き方を考えさせる授業、カリキュラムになっているか。キャリア教育、少人数教育、導入演習など、学生達にいろいろなかたちでどれだけのことをやっているかというの

が大事です。

## 燃えている学生を集める

—— こういう学生であって欲しいというように、学生像はありますか。

永井 キャンパスに、燃えている学生が集まってい欲しいですね。そうなると、「あいつはあんなことをやっている、俺も何かやらなくちゃ」となるでしょう。いかにどれだけ燃えている学生を集めるかということだと思う。

例えば将来、国際的な場で活躍したいとか、そういう夢を持たせるためには、多摩キャンパス自体が国際化していることが一番ではないか。いろいろな国の学生がいて、大学が一つの複合都市というか、多国籍都市のようになっていけば、異文化理解も自然に分かるだろうし、諸外国の学生からも刺激を受けるだろう。その中で将来、自分はその国に行ってみようとか、そういう雰囲気味わえる。

だから、キャンパスの中にそういう「チャレンジング」な学生がいることと、そういう場を確保することがまず一つです。

—— 私たち学生同士で話し合っても、国際化が中央大学の課題のひとつという話がよく出ます。国際化のほかに現状で課題だと思われることはありますか。



「燃える学生」を増やしたい、と永井総長・学長

あつちに行ったりこつちに行ったり。小さい微妙な違いで子供達を分ける。さつきも言いました、漢字のここを跳ねたか跳ねないかで2、3点変わってしまふ。そんなことに何の意味があるのかと。

私が言いたいのは、それによって自分を規定してしまう。そうするともうそこで気後れしてしまっていて、社会に出た場合、または社会に出なくても、全国的な学生のいろいろな団体の活動などで気後れして全然、堂々としない。または、自分

はこの程度だということでチャレンジしない。

## チャレンジすれば変わる

—— それはありますね。

永井 そういう学生によく言うのは、4年前に遡って人生をやり直せたらどうなると思うかと。

永井 本学の学生の中には、自己規制、自己規定をする学生もいます。

—— これ以上はできないという。

永井 そうです。子供の頃から偏差値で輪切りにされて、1点、2点の違いで分けるでしょう。中学、高校、大学で、1点違うことによつて

大学1年生だと4年前といつたら中学3年の4月でしょう。中学3年の4月に遡って人生をやり直したらどうなるのか。

そうすると、やり直せたら難関といわれる国立大学に行っていたかも分からないと言う。また大学を出るときに「4年前に遡ってやっていたら、こうはならなかった」ということを言う。

繰り返し言わないで欲しい。もうだめだと自分で規定しないで欲しい。やり直せたらこう変わっていると思うなら、これからの4年間で変わればいわけです。君らは若いのだから、いくらでもチャレンジすれば変わる。4年間努力すれば、いくらでも伸びる。

しかし、社会のそういう評価というのは朝夕には上がらない。私の学生時代からそうなのだから。それはいかに有名な人をたくさんと出すとか、うちの卒業生がどれだけ社会的に活躍するかによつて自然と社会の評価が変わる。これは10年、20年かかる。そう簡単にはいかない、ということだと思いますが、全体の意気が大事と考えています。

—— 思い切り何かをやる、ということですか。

永井 それしかない。何か夢を早くつかまえて、それに向かつてもうこれ以上できないというぐらいに努力してみれば、何か得られるのではないかと思います。資格試験もあるだろうし、また

は海外でいろいろチャレンジしたり、ボランティア活動をしたり。ただ、国際学生会議などで他大の学生などと一緒になってやって、自分はいかにもやっているように思うだろうけれども、気をつけて欲しいのは、中央大学の学生はそれだけで終わってしまう。

他大の学生はそういう活動をしていても夜は勉強もすっかりやっている学生が多い。中央大学の学生は皆と一緒にワーワーやって充実したという満足感で、家に帰るとほわーっとしている学生が多い。単にいろいろなキャリアを積むというだけではなく、何かそのためのスキル、道具となる語学力をアップさせるとか、地道な努力をおろそかにしてしまう。気がついたときには、地道な努力をした学生達はちゃんと実力もつけていて、社に出で、企業でどんどん先に行ってしまう。

## 目的に向かって努力を

—— 自己満足だけでは、いけないということですか。

永井 本当の力をつけること。実際の専門的能力、語学力などもきちんと頑張っておかないと最後のところで置いていかれる。企業の人材を探るときのファクターは、人間力の構築なんて当たり前で、それにプラスして専門的能力または語学力が要求される。自分のセールスポイントとしてこ

ういうことをやっていたとか、そういうのを売るのはいい。ただそれにプラスして、自分としてはこういう地道な努力もしてきたというのが一つのポイントだと思う。

ていることが学会の水準でどういうレベルの研究なのか。学会のトップレベルの研究になっているかどうか、そこに本当に全力投球する教員であって欲しい。教室の場では学生達を徹底的に鍛える、そして学生達を燃えさせる。そういう教育をする教員であって欲しい。

—— そのために大学の国際化を推進するということですね。

永井 国際化だけではなくて、自分の目的に向かって努力しろということ。自分ができないと思うならば倍やれと。それぞれ一人ひとりの学生が自分の夢に向かって全力を挙げて4年間、もうこれ以上できないというぐらいに努力して欲しい。

—— 高いビジョンと意識を持ち、行動力を持った学生がキャンパス内に増えて欲しいと。

永井 そうですね、増えて欲しいですね。それは一人ひとりの自分の人生設計だと思います。それをしっかりとやる。4年間はわがままに、自分がやりたいことに全力を向けていく。いろいろなことに配慮して、気を遣ってやっていたら、大成はないかもしれない。若いうちはわがままに、自分の思ったとおりに、そこにがむしゃらに向かっていくという生き方のほうがいい。

—— これから先、中央大学はこのようにしていくのだという学長のメッセージをひとつ、お願ひできますか。

永井 今、話したように、学生にはそういう学生であって欲しいし、教員達には、自分が研究し

そういう学生と教員が集まる大学になれば、先ほど言ったように、4年たって出ていくときに「我が中大生活に悔いはない。俺は、私は、思い切りやった」と言える。同じ人生を繰り返したとしても、これ以上の充実した学生生活はなかった、これ以上はできないと思って卒業してくれればこんないいことはないと思います。

(このインタビューは9月16日に行いました)

注・東京府に提出された英吉利法律学校設置願の「本校設置ノ目的」では、「邦語ニテ英吉利法律ヲ教授シ、其実地応用ヲ習練セシムルニアリス」とある。また『朝野新聞附録』に掲載された英吉利法律学校設置広告では、「實地応用ノ素ヲ養フ」とある。

### 【インタビュー／構成】

学生記者 石川可南子（法学部3年）

加藤静香（文学部1年）

渡辺紗希（法学部1年）